企業で論文を書く目的：論文を書くことがゴールではない！

企業ではあまり論文が書けないと聞いたけど、実際どうなのか？
このような話を聞いたことはありませんか？

大学、アカデミアでの大事な仕事の一つに、「論文を投稿すること」があります。
ライバルよりも先に論文を発表する、
トップジャーナルでの受理を目指す、
研究費申請のために論文をたくさん出す…

研究員それぞれの立場でモチベーションの源泉は違いますが、論文を出すことは一つのゴールであり、何よりも優先される一番大事な仕事です。しかし、企業では「論文を出すことがゴール」とは認識されていません。
「会社にとって必要な論文を書く」という感じで、
論文を書くことが大事なのではなく、
会社にとって必要かどうかが判断軸になっているケースが多いです。

今回は、
論文が会社にとって必要な場面はどういったものか
を書いていきます。

また、私は
「研究員は機会を見つけて論文を書いた方がよい」

と思っていますので、
その理由についても書いていきます。

企業では、論文を書くことは必ずしもゴールではない

会社にとって論文が必要な場面

会社の中では、主に以下のような場面で論文を書くことになります。

自社商品の価値向上に直結する研究成果が出たとき。
例えば、
「自社の食品を使って臨床試験を行った結果、睡眠の質が上がることが分かった」
「大規模観察研究のデータを解析したら、魚を多く食べている人たちでは血管系疾患が少ないことが分かった（魚介類の会社が研究主体）」というようなものです。
これらの知見を論文化することは、
科学的な裏付けを付与して自社商品の価値を高めることにつながります。
また、販売用の資料に使うことで営業資料の説得力を高め、販売に貢献することもできます。

会社のビジネス上、科学的な知見（有効性、作用メカニズムなど）を明らかにする必要があるとき。例えば、製薬会社の基礎研究や各段階の臨床試験がこのケースに当てはまると思います。
作用メカニズムが分かっていないと有効性や副作用リスクなどは分かりませんし、
臨床試験を通して有効性があることや安全性の問題がないことなどを明らかにする必要があります。

特に製薬会社の場合は、これらのデータが査読付き雑誌に掲載されることが実用化に向けて不可欠です。
ちなみに食品分野でも、
トクホや機能性表示食品を届け出る際に似たようなアプローチが行われます。

（トクホは消費者庁の認可を得る必要があり、事業者責任である機能性表示食品と比べて科学的知見をより多く求められます、この辺りは後々記事にします。）

上記のような場面では、論文を執筆することがあります。

私も自社商品の臨床試験の結果を論文にし、営業資料に内容を追記した経験があります。

新しい発見を報告するというよりも、

自社製品を売るための手段として論文を書いたという印象が強いです。

研究員は機会を見つけて論文を書いた方がよいと思う理由。

論文を書くプロセスは、研究者を成長させる。

論文は書いて投稿して終わりではありません。通常は以下のプロセスを経ます。

投稿→近い分野の研究者数名の査読→修正や追加実験が依頼される→修正版を投稿

（→必要に応じて査読と修正を繰り返す）→受理

一般的には、投稿するまでよりも投稿から受理までの方が大変です。

査読では、有意義な指摘だけでなく、予想外の着眼点でのツッコミがはいったり、無理難題を押し付けられたりします。

いろんな感情が渦巻くこの状況ですが、

自分以外の意見をもとに新しい分野を勉強したり、新しく実験系をつくるなど、

研究者として一番成長する場面だと私は思います。

このプロセスを経験することは、研究者として成長する上でもぜひ多くの人に経験してほしいです。

論文は自分の市場価値向上につながる。
アカデミアに近い考え方ですが、
論文は実名で公開される研究成果であり、
自分の専門性や研究レベルをアピールする非常に有効な手段となります。

企業に所属する研究者は、会社員であると同時に実名で活動する研究者でもあります。学術論文は特許などと並び、研究者個人の実力を外部の人に広く知ってもらう良いツールです。終身雇用が崩れつつあるこの状況では、自分の存在や実力をアピールしておいて損はありません。

私は、臨床試験の結果以外にも、会社で行った基礎研究の成果で論文を書いたことがあります。
ただし今思えば、会社で行った研究の論文は、
「会社にとって絶対に必要なものではなかった」
と感じています。

しかし、自分の書いた論文は実名と紐づいて外部に公開されています。
自分が出した成果を見た人が声をかけてくれる可能性もあるなど、今後の自分のキャリアにつながってくるはずです。

まとめ

企業では、会社にとって必要になったときに論文を書きます。
ただ、それ以外にも論文にできそうなネタがあれば、「論文にしたい」と一度提案してみましょう。
論文を投稿し公開させるプロセスは研究者個人を成長させますし、
論文は自分のキャリアを守ってくれるはずです。

企業と論文に関する、関連記事はこちら

研究職が企業で論文を書く：投稿までに乗り越えなくてはいけない壁とは？